

黄表紙の中の天帝

Providence from among the KIBYOUSHI

村上 奈帆

Nao Murakami

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード : 黄表紙, 天帝, 庶民信仰, 心学

Key words : KIBYOUSHI, TENTEI, Folk religion, Shingaku

1. 研究目的

黄表紙は草双紙の1種であり、子供向けの絵本であった赤本黒本青本に対し、当世風俗を大人向けに描いた戯作である。多くのものが3巻3冊、毎年正月に刊行され、めでたしで終わるのが原則である。

黄表紙には多くの神仏が描かれている。天照大神や七福神、閻魔大王等、現在でも馴染み深いものがほとんどであるが、それらとは別に〈天帝〉と呼ばれる神がとりわけ多く描かれていた。

天帝とは、古代中国の思想における天物造化の神、造物主である。黄表紙の中で天帝は物語を管理する立場として描かれていることが多かった。

神道や仏教に基づく信仰対象だけでなく、なぜ俗信に基づく超越的な神である天帝が好んで黄表紙に描かれたのか。

本研究では、江戸後期の黄表紙に登場する神仏、とりわけ天帝に与えられた役割や行動の傾向を分析し、さらに口絵に描かれた天帝の特徴を考察する。〈異類〉についての研究は近年化物(ばけもの)の研究が盛んであるが、神仏、中でも天帝についての研究は多く見受けられない。そこで、天帝がいつ黄表紙に登場し、どのような形でほかの黄表紙に登場し〈天帝もの〉の趣向が受け継がれていたのか、なぜ多くの黄表紙に登場したのかを明らかにすることで、黄表紙研究に新たな視点を加えることが期待できると考える。

2. 研究実施内容

黄表紙における天帝像を明らかにするため、第一章では調査対象とする寛政から享和期に刊行された黄表紙に登場する神仏、また天帝が初めて黄表紙に描かれた『天慶和句文(てんけいわくもん)』

を取り上げ、当時の民間信仰(庶民信仰)や社会背景について考察した。続いて第二章では、天帝が描かれている黄表紙について確認し、その概要と天帝のストーリー上での役割、心学との関係について考察した。第三章では天帝の描かれ方や、使役しているキャラクターについて分析した。それらの分析結果から、天帝に重ねられたイメージを考察し、なぜ黄表紙に天帝が描かれ続けたのかを考察していく。

〈第一章〉

寛政から享和期に刊行された黄表紙において、神仏が登場するものは48タイトル確認できた。そのうち最も多く黄表紙に登場していたのは〈七福神〉と〈閻魔大王〉であり、それぞれ十七タイトルあった。これは祝言の性質を満たす役割をもつために好まれて描かれている(細谷敦仁「草双紙の七福神」『黒本・青本の研究と用語索引』小池正胤叢の会 平成4年)

その他の神仏は多くが登場の人物達と共に行動し問題を起こす等、〈起承転結〉の〈承〉〈転〉で中心的に描かれている。

黄表紙に初めて天帝が描かれたのは天明4年に刊行された山東京伝作『天慶和句文(てんけいわくもん)』である。刊行された当時江戸の人々の間で天文的関心が高まっており、その時流を組み込み天上界の騒動を擬人化して描いたもので、この黄表紙に描かれた天帝が、天明6年に刊行された朋誠堂喜三二作『天道大福帳(てんとうたいふくちやう)』へ影響を与え、後続の黄表紙に〈天帝もの〉と呼ばれる趣向が生み出された。

〈第二章〉

『天慶和句文』から始まった〈天帝もの〉と呼ばれる趣向を取り入れた黄表紙は21タイトル確

認できた (表①参照)。

それらの本文・口絵を分析すると、〈心学〉を題材に扱った黄表紙に天帝がとりわけ多く描かれていることがわかった。

本来〈茶化し〉〈穿ち〉を主とする黄表紙であるが、寛政の改革による心学の流行を取り入れた結果、教訓的なストーリー展開に発展した。

上記 21 タイトルの黄表紙において、他の神仏たちのような行動をとっている天帝は確認できず、物語を管理する立場として描かれていることが確認できた。(図 1)

山東京伝『天慶句文』天明四年
朋談立書三二『新達立史臣職 天道大福帳』天明六年
山東京伝『山田 延壽院現狀』寛政元年
山東京伝『張かへし 行徳宮良札』寛政二年
山東京伝『大塚上鎌倉心 心学早染草』寛政二年
山東京伝『世上酒寄見録四』寛政三年
山東京伝『徳忌後徳ノ書玉』寛政五年
山東京伝『のしの書初音井の水引 光開権宗主』寛政五年
式部三馬『天道浮世出星操』寛政六年
柳丁百上『官徳向徳仕丹研』寛政六年
唐土参和『雲西宗正大願定』寛政七年
曲奉馬琴『管区鼓舞新訓 心学時住子』寛政七年
十返舎一九『雷門再興 御膳茂草法』寛政八年
曲奉馬琴『加古川中絶演目』寛政九年
十返舎一九『雨宮原宮 出處略後記』寛政十年
曲奉馬琴『原見草場女節用』寛政十一年
曲奉馬琴『洗摩松柳花鼓巻』寛政十一年
山東京伝『匠手手願之鏡』寛政十一年
沈吟中華明『通高宮巻草作 全世界揃帖巻』寛政十二年
白根台一九『全降豊樂書』享和二年
山東京伝『延壽長尺 御乳染巻小紋』享和二年

図 1.

〈第三章〉

黄表紙に描かれた天帝には、二種類の描かれ方があった。人間の姿で頭の後ろに後光が差しているタイプと、頭部が日輪になっているタイプである。それぞれを〈人間型〉と〈日輪型〉として分類すると、〈人間型〉の天帝が九タイトル、〈日輪型〉の天帝が 11 タイトルあった。

この他にも天帝の描かれ方には装束の違いがあった。日輪型の天帝は平安装束の束帯によく似た

装束を着ていることが多く、その形は『天道大福帳』の天帝の姿から変わらなかった。対して人間型の天帝であるが、日輪型と同じく束帯風の装束と、羽織と着物姿、また朝服や鎧を身に付けた姿のものも確認できた。これらの装束には、白の無地のものと、それに太陽と雲の柄が真中に一つ入っているものがある。また朝服を着た人間型の天帝の装束や周囲には、3つの星を山型に並べた星座が描かれていた。これらの描写から、庚申講や七夕に関係する天帝、太陽のイメージが重ねられていることが考えられる。

また天帝は全 21 タイトル中 9 タイトルで手下を使役していた。そのうち鳥と星が最も多く使役されていた。鳥は八咫鳥等で江戸では太陽(神)の化身や御使として知られており、装束と同様に太陽のイメージ、また星は天上界の支配者としての北斗七星のイメージが重ねられていると考える。

3. まとめと今後の課題

黄表紙において、天文的内容のものから心学を題材にした黄表紙へ内容が変化していく過程で、物語を支配する立場として天帝が好まれて描かれた。その天帝には庚申講や七夕に関係するものや、また太陽・北斗七星としての天帝のイメージが重ねられていることが考えられる。

なぜ黄表紙に天帝が描かれたのか。それは、黄表紙は絵入り本であり、物事を視覚化することが大きな特徴の 1 つである。そのため、視覚化され、それに心学の流行が合わさり、その後長く続く〈心学もの〉の黄表紙に、天帝という物語を管理する役割を持ったキャラクターが描き続けられたからであると言える。

今後の展望としては、今回詳しく分析できなかった天帝以外の神仏の描かれ方や役割を詳細に調査し分析することで、さらに黄表紙と〈異類〉の関係が明らかできると考えられる。

4. この助成による発表論文等

特になし